

# 小中学生における新たな向社会的行動尺度の作成 — 一向社会的行動の生起場面に着目して —<sup>1,2)</sup>

筑波大学大学院人間総合科学研究科 西村多久磨<sup>3,4)</sup>・村上 達也<sup>4)</sup>

筑波大学人間系 櫻井 茂男

Development of the new prosocial behavior inventory for elementary and junior high school students: From a view point of situational factors

Takuma Nishimura and Tatsuya Murakami (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Shigeo Sakurai (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study was to develop the new prosocial behavior inventory for elementary and junior high school students. We introduced a new perspective for study of prosocial behavior, that is, we focused on situational factors. The scale has three factors: domestic situation, scholastic situation, and social situation. A factor analysis of the scale revealed largely predictable 3 factors. From these results, we proposed another perspective that was a relational view point for future's prosocial behavior study.

**Key words:** prosocial behavior, altruistic behavior, helping behavior, interactionism, scale development

## 問題と目的

本研究では、向社会的行動 (prosocial behavior) の定義に関するこれまでの議論を整理し、まず向社会的行動の新たな定義を行う。そして、先行研究の尺度の問題点を指摘し、小中学生を対象とした新たな

な向社会的行動尺度を作成することを目的とする。

向社会的行動研究は1960年代後半から盛んになり (松崎・浜崎, 1990), 現在に至るまで多くの実証的検討が積み重ねられてきた (平井・浜崎, 1987; 川島, 1993; 菊池, 1984; 松崎, 1986; 二宮, 2005)。子どもたちの思いやり意識を育むことの必要性を唱えた近年の教育政策 (文部科学省, 2010) と相まって、向社会的行動研究には多くの関心が寄せられている。

これまで向社会的行動については様々な定義がなされてきた。例えば, Bar-Tal (1976) は“外的報酬を期待することなく, 他者に利益をもたらすためになされた自発的行動”と定義している。また, Mussen & Eisenberg (1977, 1989) では“外的な報酬を期待することなしに, 他人や他の人々の集団を助けようとしたり, こうした人々のためになることをしようとする行為”と定義し, その後“他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり, こうした人々のためになることをしようとする自発的な行

1) 本論文執筆における第一筆者と第二筆者の貢献は同等である。

2) 本研究の一部は、日本パーソナリティ心理学会第19回大会で発表された。

3) 本論文の作成にあたり鍋倉正氏と埼玉大学の首藤敏元先生には貴重なご意見をいただきました。また、筑波大学の松井豊先生には、向社会的行動研究のレビューを行うにあたり、ご助言いただきました。記して感謝申し上げます。最後に、本調査にご協力いただきました、小中学生の皆様、ならびに、現場の先生方に厚く御礼申し上げます。

4) 日本学術振興会特別研究員。

為”と再定義している。さらに、Eisenberg, Fabes, & Spinrad (2010) は“他者の利益を意図した自発的行動”と定義している。この他にも、Buss (1986) は“他者の利益を優先させる社会的に好ましい行動”と定義している。本邦においても菊池 (1986) は、向社会的行動を四つの条件を用いて定義している。それらは、①その行動が他者あるいは他の集団に対する援助行動である、②相手からの外的な報酬を得ることが目的であってはならない、③行動をする側になんらかの損失が生じている、④その行動が自発的になされる、である。また、外的報酬や自発性の条件については、状況に応じて柔軟に適用する必要性が述べられている。さらには、竹村・高木 (1987) による“援助 (helping) に代表されるように、一般に、何らかの外的な報酬を期待することなく自由意思から他者に恩恵を与える行動”などの定義がある。

これらのような向社会的行動の定義が複数存在する背景については、研究者それぞれの多様な価値観や考え方があり (Eisenberg, 1982), 研究者間においても概念定義における混乱が見られているものと思われる。その上で、何が向社会的行動の独自性であり、かつ中核的な要素なのかを把握するためには、向社会的行動の類似概念とされる愛他的行動 (altruistic behavior) や援助行動 (helping behavior) との異同に関する議論を踏まえておく必要があると考えられる。

向社会的行動、愛他的行動、援助行動は代替可能な概念として扱われることもあるが (Bar-Tal, 1982; Bar-Tal, Raviv, & Leiser, 1980), 概念間の関係や異同については、いくつかの指摘がなされている。例えば、Eisenberg (1982) は愛他的行動と向社会的行動の共通点として、ポジティブ行動 (positive behavior) という言葉を用いて捉えている。ポジティブ行動とは、“その行動の動機に関わらず他者の利益になる行動”のことである (松崎, 1986)。また、Eisenberg (1982) は愛他的行動と向社会的行動の相違を行動の動機という観点から説明している。すなわち、愛他的行動は、他者の利益のために外的報酬を期待することなくなされた内発的な行動であるのに対し、向社会的行動は他者に利益をもたらす自発的な行動ではあるが、報酬や賞賛を獲得するといった動機による行動も含まれるという。さらに Bar-Tal (1976) や Staub (1978) も同様に、愛他的行動は向社会的行動よりも高次な動機 (内発的あるいは自発的な動機) に基づく行動と見なしており、相川 (1999) も、自分の利益よりも他者の幸福が大切だとする価値観が内面化された動機が仮定されたものが愛他的行動であると述べている。この高次な

動機による行動という観点は、援助行動と愛他的行動の相違に言及した Bar-Tal et al. (1980) でも用いられ、高次な動機による行動か否かによって、援助行動と愛他的行動を分類することができるとされている。また、中村 (1987) は、三つの概念の弁別条件について、純粹に他者のことだけを思い“他者を助ける行動”が愛他的行動であり、多少は外的な賞などを当てにしたような“他者 (ひと) 助け行動”も含めて援助行動と呼び、社会が肯定するような行為の一般的表現が向社会的行動になると述べている。さらに、岩立 (1995) は、中村 (1987) を参考に、3概念を整理する枠組みを提案し (Fig. 1), 動機の内容と下位行動の範囲によって区別できると主張している。具体的には、愛他的行動が向社会的行動の中でも高次の動機に基づく行動であるとし、援助行動を人助けの行動全てに該当するとした。そして、社会が肯定するような行為として協同や分与などを含めた行動全般を向社会的行動と捉え、その中に援助行動や愛他的行動が含まれることを想定している。

以上の見解を整理すると、向社会的行動では、先述したように愛他的行動で強調されている内発的な高次な動機づけという条件は強調されていないという見方が一般的であるといえる。また、中村 (1987) が述べたように、社会が肯定するような行動であるという点が、向社会的行動の独自性の一つとして指摘できよう。Buss (1986) や岩立 (1995) も、向社会的行動は社会的に好ましい行動と述べており、向社会的行動を定義するにあたっては、社会的な価値を有しているという点が強調される必要があると考えられる。

一方、三つの概念の共通点は、その行為の動機に関わらず他者や集団 (一人以上の他者) に利益をも

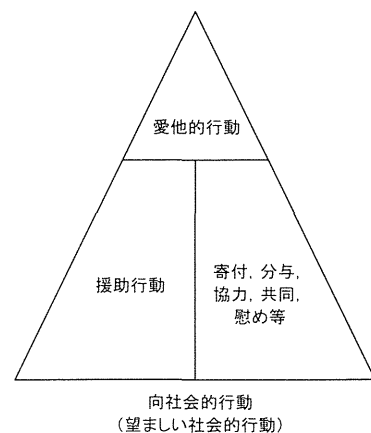


Fig. 1 岩立 (1995) が提案した3概念の関連図

たらずという点である。これは Eisenberg (1982) が提案したポジティブ行動の条件そのものである。そして、そのような行為には、体力や金銭のロス、時間の損失などのコストを払うという側面が伴う。このコストを払うという側面は、援助行動の生起の説明に用いられる覚醒モデル (the arousal aversive model, cost-reward model; Piliavin, Dovidio, Gaertner, & Clark, 1981) でも想定されており、向社会的行動の定義をする際には、少なくとも個人内のコストを払うという点と被援助者に利益をもたらすポジティブ行動である点を考慮する必要があると考えられる。以上を踏まえ、本研究では、向社会的行動を以下のように定義する。すなわち、向社会的行動とは“社会的価値を有し、コストを払って一人以上の他者に利益をもたらす行動”のことである。

さて、新たな向社会的行動尺度の作成にあたり、以下、本邦における尺度について概観し、その特徴と問題点を整理する。まず、菊池 (1986) は Rushton, Chrisjohn, & Fekken (1981) の愛他性尺度を参考に行動リストを作成し、大学生用の尺度を作成している。中高生を対象としたものとして、横塚 (1989) は自由記述調査から向社会的行動の項目を収集し、最終的に20項目から構成される尺度を作成している。さらに、伊藤 (2006)、桜井 (1986) は児童用の尺度を作成している。これらの尺度において重視されているのは向社会的行動の行動レパー

トリーであり、分与、気遣い、思いやり、協力や協同、寄付などの行動の形態に着目している。

一方で、こうした本邦の向社会的行動尺度は、場面という状況から捉えなおすことができる。例えば、菊池 (1986) は“家族”、“学校”、“社会”の3領域に関する思いやり行動リストを作成し、横塚 (1989) は、因子分析によって、“家族”、“友人への行動的援助”、“寄付・奉仕”、“友人への学習面への援助”、“友人への心理的援助”という5因子を見出している。ただし、菊池 (1986) や横塚 (1989) では、最終的な指標として全項目の合計得点を用いており、向社会的行動における場面という状況は重要視されていないことが指摘できる。しかし、状況要因に着目した研究では、状況 (e.g., 援助場面の性質、環境など) によって向社会的行動の生起がコントロールされることが示されている (原田, 1986)。したがって、状況という観点から、複数の場면을想定した向社会的行動尺度を作成することは、向社会的行動を適切に理解する上でも、十分に意義があると考えられる。

そこで本研究では、小中学生を対象に、場面という状況に着目した向社会的行動尺度の作成を試みる。向社会的行動の生起場面としては、菊池 (1986) を参考に“家庭”、“学校”、“地域社会”の三つの場면을想定する。また、新たに定義したように、向社会的行動の独自性要因にあたる社会的価値を有しているか否かに

Table 1 向社会的行動を測定する項目の予備案 (20項目)

|      |    |   |
|------|----|---|
| 家庭   | 分与 | 家ぞくのたん生日、お祝いの日、父の日、母の日にプレゼントをした。<br>家ぞくに自分の物をかした。   |
|      | 援助 | 家ぞくの人がつかれている時に、家事を手伝った。<br>家ぞくの誰かが体調がわるいとき、かんびょうした。   |
|      | 協力 | 家ぞくの人を持っている重たい荷物を少し持ってあげた。<br>家ぞくの人さがし物をしているとき、いっしょにさがした。   |
| 学校   | 分与 | 登下校中に、雨がふってきたとき、友だちをカサの中に入れてあげた。<br>学校で、わすれ物 (えんぴつ、消しゴムなど) をした友だちに、自分のものをかした。<br>休み時間に、あそび道具 (一輪車、ボールなど) があと1つのとき、友だちにゆずった。         |
|      | 援助 | 学校で、いやなことをされている友だちを助けてあげた。<br>ケガや病気の友だちを、ほけん室までつれて行った。<br>休み時間中に、あそびに入りたそうな人を、あそびに入れてあげた。<br>じゅ業中、とくいな教科で、友だちがわからないことがあったとき、教えてあげた。 |
|      | 協力 | 学校で、友だちが荷物をたくさん持っているときに、少し持ってあげた。<br>先生に作業をたのまれた友だちを、手つだってあげた。  |
| 地域社会 | 分与 | 赤いはねや緑のはねなどに、ほ金した。<br>電車やバスで、お年よりに席をゆずった。   |
|      | 援助 | 知らない人が落し物をしたときに、ひろってあげた。<br>地域の人が、道で具合がわるそうにしているとき、声をかけてあげた。  |
|      | 協力 | 地域のバザーやリサイクル運動に参加した。  |

については確認する必要がある、これを妥当性の一部として検討する。以上より、研究Ⅰでは向社会的行動尺度の項目の選定と因子構造の検討を行い、研究Ⅱでは尺度の内容的妥当性の検討を行うこととする。

## 研究Ⅰ 向社会的行動尺度の項目の選定

### 目的

向社会的行動の生起場面として、“家庭”、“学校”、“地域社会”に着目した向社会的行動尺度の項目を選定する。

### 方法

**項目の収集** 向社会的行動尺度の原案を作成するために、第一筆者と第二筆者及び発達心理学を専攻している大学院生計3名による検討が以下のように行われた。まず、子どもを対象とした向社会的行動及びそれに類する行動を扱った研究（藤枝・相川, 2001; 伊藤, 2006; 菊池, 1986; 桜井, 1986, 1999; 首藤, 1990; 横塚, 1989）を参考に、84項目から構成されるリストを作成した。そして、“家庭”、“学校”、“地域社会”という場面を設定した上で、向社会的行動の形態として多く扱われている“分与 (sharing)”, “援助 (giving aid)”, “協力 (cooperating)”に着目し、20項目から構成される原案を作成した (Table 1)。その際の留意点は、以下の4点であった。第1に、小中学生が想起しやすい場面を用いた項目にすること、第2に、社会的価値を有すると予想される項目にすること、第3に、社会的規範が強すぎないようにすること、第4に、内的過程に踏み込まないようにすること<sup>5)</sup>、であった。

5) 内発的な高次の動機づけという内的過程に関する条件を特定し表現することは不可能ではないものの難しいことが指摘されている (Eisenberg & Mussen, 1989; Staub, 1978)。例えば、Eisenberg (1982) は内発的な行為を行ったとしても、結局のところ、実行した際には自尊心を高め自己満足という報酬を得ていると指摘し、また、内面化した価値観に一致しない行動を選択した際に想起される罪悪感などによって行動がなされているのではないかという指摘もある (Batson, Bolen, Cross, & Neuringer-Benefiel, 1986)。そして、罰を回避するために他者の利益を優先させる行動が選択されるという否定的気分除去仮説も提唱されており (Schaller & Cialdini, 1988)、現状では純粋な内発的な行為は存在するのかといった議論もある。以上より、向社会的行動の生起に関して、背後にある動機などの内的過程に関する条件は、適切に表現することができないため、項目を作成するにあたっては避ける必要があると判断した。

なお、本研究において三つの形態については以下のように定義がなされた。すなわち、分与は“自分のものや権利などを他者に貸すまたは与える行動”とした。援助は“困難な状況にある他者に対して、その状況を改善するような手助けをする行動”とした。協力とは“他者の負担を引き受けて、他者と共にする行動”とした。

**調査協力者** 関東圏の公立小学校3校の4～6年生491名、公立中学校2校1～3年生577名、総計1,068名（男子549名、女子519名）を対象とした。内訳は、小学4年生186名、5年生159名、6年生146名、中学1年生194名、2年生166名、3年生217名であった。

**調査時期** 2009年9月上旬であった。

**調査内容** 向社会的行動尺度原案20項目を用いた。家庭場面が6項目、学校場面が9項目、地域社会場面が5項目から構成されていた。教示は「以下の項目について、今までどのくらいしてきましたか?」とし、4件法（1: したことがない、2: 少しした、3: まあまあした、4: いつもした）による回答を求めた。

**手続き** 授業時間の一部及びホームルームの時間に集団方式で実施した。調査は学校の成績と一切関係がないこと、回答は強制ではないこと、個人のプライバシーは守られることをフェイスシートに明記した。

## 結果と考察

**因子構造の検討** 向社会的行動尺度原案20項目に対して、重み付けのない最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の減少推移は、5.19, 1.56, 1.22, 0.80, …、であり、第4因子において固有値が1を下回った。そこで、因子数を3に設定し、再度同様の因子分析を行い、初期解を得た。次に、どの因子にも.30以上の負荷量が見られない項目と複数の因子に.30以上の負荷量を示している項目を除外し、さらに単純構造が得られるように同様の因子分析を繰り返した。その結果、最終的に3因子16項目からなる解を採用した。結果をTable 2に示した。

第1因子には“ケガや病気の友だちを、ほけん室までつれて行った”などの項目が高い負荷を示し、“学校場面における向社会的行動”因子（学校場面因子）と解釈した（7項目）。第2因子には“家ぞくの人が持っている重たい荷物を少し持ってあげた”などの項目が高い負荷を示し、“家庭場面における向社会的行動”因子（家庭場面因子）と解釈した（6項目）。第3因子には“地域の人が、道で具合がわるそうにしているとき、声をかけてあげた”

などの項目が高い負荷を示し、“地域社会場面における向社会的行動”因子（地域社会場面因子）と解釈した（3項目）。しかし、地域社会場面因子に想定されていた“赤いはねや緑のはねなどにほ金した”は、学校場面因子に高い負荷を示し、予想していない結果も一部見られた。

**内的一貫性の検討** 尺度の内的一貫性を検討するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、学校場面における向社会的行動が.84、家庭場面に

における向社会的行動が.82、地域社会場面における向社会的行動が.62であった。また項目全体での向社会的行動については.90であった。地域社会場面における向社会的行動を除いて十分な内的一貫性が確認された。以後、各下位尺度の加算平均得点を尺度得点として用いることとした。各下位尺度の基本統計量をTable 3に示した。

**尺度間の相関** 下位尺度間の相関関係を明らかにするために、相関分析を行った。その結果、家庭場

Table 2 向社会的行動尺度の因子分析結果（重み付けのない最小二乗法・Promax回転後）

| Item                                     | 初期解  |      |      | 最終解  |      |      |
|--|------|------|------|------|------|------|
|  | F1   | F2   | F3   | F1   | F2   | F3   |
| <b>第Ⅰ因子：学校場面における向社会的行動（学校場面因子）</b>       |      |      |      |      |      |      |
| ケガや病気の友だちを、ほけん室までつれて行った。                 | .74  | .00  | -.06 | .71  | -.03 | .01  |
| 学校で、わすれ物（えんぴつ、消しゴムなど）をした友だちに、自分のものをかした。  | .69  | .06  | -.14 | .68  | .04  | -.09 |
| 学校で、友だちが荷物をたくさん持っているときに、少し持ってあげた。        | .67  | .00  | .02  | .64  | -.04 | .12  |
| じゅ業中、とくいな教科で、友だちがわからないことがあったとき、教えてあげた。   | .60  | .04  | -.04 | .59  | .07  | -.06 |
| 先生に作業をたのまれた友だちを、手つだってあげた。                | .55  | -.02 | .18  | .55  | -.02 | .20  |
| 赤いはねや緑のはねなどに、ほ金した。                       | .52  | .07  | -.04 | .50  | .13  | -.09 |
| 登下校中に雨がふってきたとき、友だちをカサの中に入れてあげた。          | .47  | .00  | .15  | .48  | .03  | .12  |
| 休み時間に、あそび道具（一輪車、ボールなど）があと1つのとき、友だちにゆずった。 | .43  | -.04 | .33  |      |      |      |
| 地域のバザーやリサイクル運動に参加した。                     | .27  | .08  | .26  |      |      |      |
| <b>第Ⅱ因子：家庭場面における向社会的行動（家庭場面因子）</b>       |      |      |      |      |      |      |
| 家ぞくの人がつかれてる時に、家事を手つだってあげた。               | -.02 | .72  | -.04 | -.04 | .69  | .02  |
| 家ぞくの人、さがし物をしているとき、いっしょにさがした。             | -.08 | .72  | .08  | -.07 | .72  | .06  |
| 家ぞくの人を持っている重たい荷物を少し持ってあげた。               | -.07 | .72  | .10  | -.05 | .74  | .05  |
| 家ぞくのたん生生日やお祝いの日、父の日、母の日にプレゼントをした。        | .17  | .65  | -.15 | .16  | .63  | -.13 |
| 家ぞくに自分の物をかした。                            | .17  | .52  | -.01 | .18  | .53  | -.02 |
| 家の人が、体調がわるいとき、かんびょうした。                   | .11  | .52  | .16  | .13  | .53  | .12  |
| <b>第Ⅲ因子：地域社会場面における向社会的行動（地域社会場面因子）</b>   |      |      |      |      |      |      |
| 地域の人が、道で具合がわるそうにしているとき、声をかけてあげた。         | -.18 | -.04 | .84  | -.09 | -.01 | .74  |
| 知らない人が落し物をしたときに、ひろってあげた。                 | .13  | .09  | .46  | .16  | .08  | .45  |
| 休み時間中に、あそびに入りたそうな人を、あそびに入れてあげた。          | .31  | .03  | .42  |      |      |      |
| 学校で、いやなことをされている友だちを助けてあげた。               | .30  | .02  | .38  |      |      |      |
| 電車やバスで、お年よりに席をゆずった。                      | .09  | .08  | .32  | .07  | .04  | .43  |
| 因子間相関                                    | F1   | .72  | .76  | .72  | .70  |      |
|  | F2   |      | .67  |      | .64  |      |

Table 3 向社会的行動尺度の基本統計量と下位尺度間相関

|                    | M    | SD   | ②     | ③     | ④     |
|--------------------|------|------|-------|-------|-------|
| ① 向社会的行動（全体）       | 2.67 | 0.63 | .89** | .90** | .74** |
| ② 家庭場面における向社会的行動   | 2.90 | 0.76 | —     | .65** | .53** |
| ③ 学校場面における向社会的行動   | 2.66 | 0.69 | —     | —     | .56** |
| ④ 地域社会場面における向社会的行動 | 2.23 | 0.79 | —     | —     | —     |

注) \*\* $p < .01$

面における向社会的行動は、学校場面における向社会的行動及び地域社会場面における向社会的行動と正の相関関係（順に、 $r = .65, p < .01$ ;  $r = .53, p < .01$ ）が示され、学校場面における向社会的行動と地域社会場面における向社会的行動においても正の相関関係（ $r = .56, p < .01$ ）が示された。向社会的行動の全体の得点と各下位尺度においては強い正の相関関係が確認された（ $r = .74 \sim .90, p < .01$ ）。

## 研究Ⅱ 向社会的行動尺度の妥当性の検討

### 目的

研究Ⅰで作成した向社会的行動尺度の項目について社会的価値を有しているかを検討する。

### 方法

**調査協力者** 関東の大学に在学している大学生及び大学院生29名（男性9名、女性19名、不明1名；平均年齢23.38歳（ $SD = 3.65$ ））とA県の公立小学校の教員25名（男性8名、女性17名；平均年齢42.40歳（ $SD = 12.08$ ））が対象であった。教員25名は学級担任であった。

**調査時期** 2012年2月下旬～3月上旬であった。

**調査内容** 研究Ⅰで作成した向社会的行動尺度を構成する16項目に対して、それらの項目がどの程度社会的に価値があるかどうか尋ねた。教示は、「以下には小学生が様々な相手に対して行う行動リストが挙げられています。これらの行動はどの程度、社会的に良い行動だと思いますか？」とし、6件法（1：全く良いとは思わない、2：良いとは思わない、3：あまり良いとは思わない、4：やや良いと思う、5：良いと思う、6：非常に良いと思う）による回答を求めた。

**手続き** 大学生及び大学院生については、第一筆者および第二筆者が個別に依頼をした。小学校教員については、書面にて小学校の校長と教頭に依頼し、承諾を得て実施した。回答は強制ではないこと、個人のプライバシーは守られることを伝え、また、その点をアンケートのフェイスシートに明記した。

### 結果と考察

**基本統計量と1サンプルのt検定** まず、大学生及び大学院生の回答と小学校教員の回答を別々に集計した。大学生及び大学院生の項目評定の平均値は4.66～5.69であり、小学校教員による項目評定の平均値は4.64～5.76であった。次に、検定値を理論的中間値の3.5に設定し、1サンプルのt検定を行った。結果をTable 4に示した。有意確率を5%に設

定した際のt分布の臨界値は、それぞれ、 $t(28) = 2.05$ 、 $t(24) = 2.06$ であり、全ての項目の得点が検定値（3.5）よりも5%水準で有意に高いことが示された。これらのことから、研究Ⅰで作成された向社会的行動尺度の各項目は、社会的価値を有していることが明らかにされた。

### 総合的考察

本研究では、先行研究において様々な定義がなされていた向社会的行動の定義を概観し、向社会的行動を“社会的価値を有し、コストを払って一人以上の他者に利益をもたらす行動”と定義した。また、場面という状況に着目して新たな向社会的行動尺度の作成を行った。研究Ⅰでは、尺度項目の選定と尺度の因子構造の検討、研究Ⅱでは尺度の内容的妥当性の検討を行った。

まず、尺度の構造について、研究Ⅰでは、探索的な因子分析を繰り返し、尺度項目の選定を行った。その結果、家庭場面における向社会的行動、学校場面における向社会的行動、地域社会場面における向社会的行動の3因子を抽出した。地域社会場面における向社会的行動を除いて十分な内的一貫性が確認され、尺度については一定の信頼性が確認されたといえる。

これら3因子は、菊池（1986）によって想定されていた尺度内容と対応しており、概ね予想通りの結果であるといえる。しかし、地域社会場面因子に高い負荷を示すものと予想されていた向社会的行動（赤いはねや緑のはねなどにぼ金した、など）が学校場面に負荷するといった予想に反する結果も一部得られた。こうした項目が学校場面に高い負荷を示した理由としては、赤いはねや緑のはねなどの募金活動は学校においても実施されていることから生じたものと考えられる。

また、Table 2で示した最初のステップにおいて、20項目を用いて因子分析を行った結果、場面では明確な因子構造が得られないことも示唆された。この結果は、場面という観点では内的な一貫性が十分に得られず、場面以外の要因が混在している可能性を示唆している。学校場面因子に高い負荷を示した地域社会場面を想定した項目をはじめ、特に第3因子には、学校場面と地域社会場面に予想された項目が混在していた。例えば、“休み時間中に、あそびに入らそうな人を、あそびに入れてあげた”などの項目は、本来は学校場面を想定して作成した項目であり、何故、第3因子に属しているかについては解釈が難しいところである。

この原因としては、文脈依存記憶の研究などで指摘されているように、物理的な環境ではなく内的な心理的要因が記憶の復元において、より重要であること (Fernandez & Glenberg, 1985) から一定の理解が得られるものと考えられる。すなわち、場所という物理的な環境は、向社会的な行動を弁別する適切な要因ではなく、心理的な要因、例えば、被援助者との関係性という状況要因などが適切であるという考えである。個人にとって親しい人や同じグループに所属する人など、対象によって向社会的行動をするかどうかの判断は変わって来るとも考えられる。因子分析の結果の解釈において視点を変えれば、Table 2 で示した最初のステップにおける第3因子には、自分とはあまり関係のない人に対する向社会的行動がまとまっているとも考えられる。こうした見解を踏まえ、今後は本尺度の項目について精選し、尺度の因子構造について改善していく必要がある。

研究IIでは、研究Iで作成した尺度の内容的妥当性の検討を行った。向社会的行動の独自性要因である社会的な価値を有しているという条件を満たしているか否かを検討するために、大学生及び大学院生、小学校教員からの評定を得た。その結果、各項

目間において程度の差はあるものの、理論的中間値よりも5%水準で有意に得点が高く、本研究で作成した向社会的行動尺度を構成する各項目は、社会的な価値を有していることが明らかにされた。以上をもって、本研究で作成した尺度は一定の信頼性と妥当性を有していることが示されたと考えられる。

さて、本研究の意義は以下の2点に集約することができる。第1に、統一的な定義がなされていなかった向社会的行動という概念について、類似概念とされる愛他的行動や援助行動との異同の議論を基に、再定義した点である。先行研究における定義を整理し、社会的価値を有するという独自要素を抽出した点は、概念間の混乱が見られていた当該研究領域 (二宮, 2005) において大きな貢献をしたものと考えられる。そして第2に、向社会的行動を三つの場面という状況から捉え直し尺度を作成した点である。このアイデアによって、以下に示す可能性を示唆することができたものと考えられる。

パーソナリティ研究では、人間の行動は、パーソナリティと状況要因の関数であると考え、パーソナリティと状況要因の両方が重要であるという相互作用論 (interactionism) に基づくアプローチが台頭してきた (Alker, 1972; Ender & Magnusson, 1976)。

Table 4 各向社会的行動に対する1サンプルのt検定の結果

| Item                                      | 大学生・大学院生 |      |       | 小学校教員 |      |       |
|---|----------|------|-------|-------|------|-------|
|   | M        | SD   | t値    | M     | SD   | t値    |
| <b>学校場面における向社会的行動</b>                     |          |      |       |       |      |       |
| ケガや病気の友だちを、ほけん室までつれて行った。                  | 5.13     | 0.79 | 11.17 | 5.20  | 0.58 | 14.72 |
| 学校で、わずれ物 (えんぴつ、消しゴムなど) をした友だちに、自分のものをかした。 | 5.03     | 0.82 | 10.04 | 4.64  | 1.08 | 5.30  |
| 学校で、友だちが荷物をたくさん持っているときに、少し持ってあげた。         | 4.86     | 0.88 | 8.38  | 5.16  | 0.62 | 13.29 |
| じゅ業中、とくいな教科で、友だちがわからないことがあったとき、教えてあげた。    | 4.83     | 0.89 | 8.04  | 4.92  | 0.86 | 8.24  |
| 先生に作業をたのまれた友だちを、手つだってあげた。                 | 4.76     | 0.99 | 6.86  | 4.92  | 0.81 | 8.74  |
| 赤いはねや緑のはねなどに、ほ金した。                        | 4.83     | 1.10 | 6.47  | 5.04  | 0.79 | 9.75  |
| 登下校中に雨がふってきたとき、友だちをカサの中に入れてあげた。           | 5.28     | 0.80 | 12.00 | 5.20  | 0.71 | 12.02 |
| <b>家庭場面における向社会的行動</b>                     |          |      |       |       |      |       |
| 家ぞくの人がかかっている時に、家事を手つだってあげた。               | 5.52     | 0.74 | 14.72 | 5.68  | 0.63 | 17.38 |
| 家ぞくの人、さがし物をしているとき、いっしょにさがした。              | 4.83     | 1.04 | 6.89  | 5.08  | 0.70 | 11.25 |
| 家ぞくの人を持っている重たい荷物を少し持ってあげた。                | 5.00     | 0.76 | 10.69 | 5.08  | 0.64 | 12.34 |
| 家ぞくのたん生日やお祝いの日、父の日、母の日にプレゼントをした。          | 5.28     | 0.80 | 12.00 | 5.04  | 0.73 | 10.48 |
| 家ぞくに自分の物をかした。                             | 4.66     | 1.14 | 5.44  | 4.64  | 0.86 | 6.63  |
| 家の人が、体調がわるいとき、かんびょうした。                    | 5.14     | 0.88 | 10.08 | 5.52  | 0.77 | 13.11 |
| <b>地域社会場面における向社会的行動</b>                   |          |      |       |       |      |       |
| 地域の人が、道で具合がわるそうにしているとき、声をかけてあげた。          | 5.34     | 0.81 | 12.21 | 5.60  | 0.58 | 18.19 |
| 知らない人が落し物をしたときに、ひろってあげた。                  | 5.00     | 1.04 | 7.80  | 5.28  | 0.84 | 10.56 |
| 電車やバスで、お年よりに席をゆずった。                       | 5.69     | 0.54 | 21.78 | 5.76  | 0.52 | 21.61 |

注) 検定値は理論的中間値の3.5であった。 $t(28) = 2.05$  ( $p = .05$ ),  $t(24) = 2.06$  ( $p = .05$ )

向社会的行動についても例外ではなく、パーソナリティと状況要因の相互作用が重要とされている(Krahé, 1992)。しかしながら、本邦の向社会的行動尺度においては、全項目の合計得点が扱われている点が見られるように、向社会的なパーソナリティ特性が暗に仮定され、相互作用論による考えは十分に反映されてこなかった。他方、先述したように状況要因に着目した向社会的行動研究では、状況(e.g., 援助場面の性質, 環境など)によって向社会的行動の生起がコントロールされることが示されている(原田, 1986)。以上を踏まえると、本研究の取り組みは、パーソナリティ特性と状況の相互作用論的アプローチを取り入れた研究と位置付けることもできる。このような意味において、質問紙法を基盤とした向社会的行動研究に、状況という視点を取り入れることによって、新たなアプローチを提供することができたものと考えられる。

最後に、今後の展望について本研究の限界を踏まえながら以下に3点指摘しておく。

第1に、尺度の妥当性についての十分な証拠が提出されていない点である。本研究では、社会的価値を有しているか否かという点について、大学生と大学院生、および小学校の教員からの評定により妥当性に関する証拠を得た。しかし、尺度の妥当性については複数の方法に基づき検討される必要があり、今後の課題の一つといえる。例えば“コストを払って一人以上の他者に利益をもたらす行動”の部分については、実際に他者に利益をもたらしているかどうかについても検討する必要がある。今後、概念定義に沿って妥当性に関する適切な証拠を提出していくことが期待される。

第2に、下位尺度の弁別性が示されていない点である。本研究では、“家庭”、“学校”、“地域社会”という場面に着目したが、これらの状況要因を扱う意義については十分に示せてはいない。打開策としては、例えば、向社会的行動の質を発達的な観点から状況ごとに検討していくことが考えられる。渡辺・高野(1986)では援助行動の動機は、年齢が上がるにつれ、外発的な動機から内発的な動機へと変化していくことを報告しているが、各場面における向社会的行動の背景にある理由の変化に着目することも、各状況の弁別性を示す一つの方法であろう。Kohlberg(1969)の道徳判断の発達やBar-Tal, Raviv & Shavit(1981)が提出した援助行動の動機の発達段階に照らし合わせ、各場面の向社会的行動と理由との関連を見ていくことも、有効な検証方法の一つになりうると考えられる。

第3に、尺度の因子構造について再検討する必要

があるという点である。研究Iで示されたように、場面という状況要因では明確な因子構造が抽出されない可能性が示唆された。上述したように、今後は、他者との関係性などの観点から、向社会的行動を捉え直し、適切な尺度構造を模索していくことも必要であろう。

## 引用文献

- 相川 充(1999). 愛他的行動 心理学辞典, p.3, 有斐閣
- Alker, H.A.(1972). Is personality situationally specific or intrapsychically consistent? *Journal of Personality*, **40**, 1-16.
- Bar-Tal, D.(1976). *Prosocial behavior: Theory and research*. New York: Halsted Press.
- Bar-Tal, D.(1982). Sequential development of helping behavior: A cognitive-learning approach. *Developmental review*, **2**, 101-124.
- Bar-Tal, D., Raviv, A., & Leiser, T.(1980). The development of altruistic behavior: Empirical evidence. *Developmental Psychology*, **16**, 516-524.
- Bar-Tal, D., Raviv, A., & Shavit, N.(1981). Motives for helping behavior: Kibbutz and city children in kindergarten and school. *Developmental Psychology*, **17**, 766-772.
- Batson, C.D., Bolen, M.H., Cross, J.A., & Neuringer-Benefiel, H. E.(1986). Where is the altruism in the altruistic personality? *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 212-220.
- Buss, A.H.(1986). *Social Behavior and Personality*. In A. H. Buss (Ed.), Lawrence Erlbaum Associates. (バス, A. H. 大淵憲一(監訳)(1991). 対人行動とパーソナリティ 北大路書房)
- Eisenberg, N.(1982). *Introduction*. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press. pp.1-21.
- Eisenberg, N., Fabes, R.A., & Spinrad, T.L.(2010). Prosocial development. In P. K. Smith & C. H. Hart (Eds.), *Blackwell handbook of childhood social development*. Oxford: Blackwell Publishers, pp.646-718.
- Eisenberg, N., & Mussen, P.(1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Endler, N.S., & Magnusson, D.(1976). Toward an interactional psychology of personality. *Psychological Bulletin*, **83**, 956-974.



- Fernandez, A., & Glenberg, A.M.(1985). Changing environmental context does not reliably affect memory. *Memory & Cognition*, **13**, 333-345.
- 藤枝静暁・相川 充 (2001). 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, **49**, 371-381.
- 原田純治 (1986). 向社会的行動と状況要因 対人行動研究会 (編) 対人行動の心理学 誠信書房 pp.257-267.
- 平井誠也・浜崎隆司 (1987). 向社会的行動 原野広太郎・小嶋秀夫・宮本美沙子・大村彰道・高橋恵子・湯川良三 (編) 「児童心理学の進歩」26巻, 金子書房 pp.219-246.
- 伊藤順子 (2006). 幼児の向社会性についての認知と向社会的行動との関連: 遊び場面の観察を通して 発達心理学研究, **17**, 241-251.
- 岩立京子 (1995). 幼児・児童における向社会的行動の動機づけ 風間書房
- 川島一夫 (1993). 児童における愛他行動と向社会的行動研究の動向 信州大学教育学部紀要, **79**, 67-77.
- 菊池章夫 (1984). 向社会的行動の発達 教育心理学年報, **23**, 118-27.
- 菊池章夫 (1986). 思いやりを測る こころの科学, **8**, 22-27.
- Kohlberg, L.(1969). Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research*. Chicago: Rand McNally. pp.347-380.
- Krahé, B.(1992). *Personality and Social Psychology*. In B. Krahé (Ed.), Sage Publications Ltd. (クラエ, B. 堀毛一也 (監訳) (1991). 社会的状況とパーソナリティ 北大路書房)
- 松崎 学 (1986). 向社会的行動と状況要因 対人行動研究会 (編) 対人行動の心理学 誠信書房 pp.253-257.
- 松崎 学・浜崎隆司 (1990). 向社会的行動研究の動向—内的プロセスを中心に— 心理学研究, **18**, 193-210.
- 文部科学省 (2010). 生徒指導提要
- Mussem, P., & Eisenberg-Berg, N.(1977). *Roots of caring, sharing and helping: The development of prosocial behavior in children*. San Francisco: Freeman.
- Mussem, P., & Eisenberg-Berg, N.(1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中村陽吉 (1987). 援助行動とは 中村陽吉・高木修 (共著) 「他者を助ける行動」の心理学 光生館
- 二宮克美 (2005). 日本における向社会的行動研究の現状—この20年間の歩みと課題— 東海心理学研究, **1**, 45-54.
- Piliavin, J.A., Dovidio, J.F, Gaertner, S.L., & Clark, R.D.(1981). *Emergency Intervention*. New York, NY: Academic Press.
- Rushton, L.P., Chrisjohn, R.D., & Fekken, G.C. (1981). The altruistic personality and the self-report altruism scale. *Personality and Individual Differences*, **2**, 293-302.
- 桜井茂男 (1986). 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, **34**, 342-346.
- 桜井茂男 (1999). 子どものやる気と社会性 風間書房
- Schaller, M., & Cialdini, R.B. (1988). The economics of empathic helping: Support for a mood management motive. *Journal of Experimental Social Psychology*, **24**, 163-181.
- Staub, E.(1978). Positive social behavior and morality: Social and personal influences. Vol. 1. New York: Academic Press. pp. 293-341.
- 首藤敏元 (1990). 児童の愛他性における共感性と道徳性判断の役割 埼玉大学紀要, **39**, 59-72.
- 竹村和久・高木 修 (1987). 向社会的行動の動機と内的・外的統制志向性 教育心理学研究, **35**, 26-32.
- 横塚怜子 (1989). 向社会的行動尺度 (中学生版) 作成の試み 教育心理学研究, **37**, 158-162.
- 渡辺弥生・高野清純 (1986). 児童における援助行動と動機について 筑波大学心理学研究紀要, **8**, 81-86.

(受稿 3月30日 : 受理 5月7日)